
ファンタシースターポータブル2i ~ 異世界の5人 ~

サイクロン&ハリケーン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ファンタジースターポータブル2 in 異世界の5人

【Nコード】

N4736Z

【作者名】

サイクロン&ハリケーン

【あらすじ】

それは遠い星のお話。軍事会社リトルウィングにルーク・フィレンという青年がいた。彼は亜空間事件を解決した英雄である。欠片事件から1年数ヶ月がたったある日、何やら怪しい5人がある会話をしている。彼等は何者なのか、まだするのは先の事である。

プロローグ：謎の5人（前書き）

初投稿です。自信がないですが、どうぞ御覧ください（ちなみに主人公はまだ出ません）。

プロローグ：謎の5人

? 「ここは、どこだ？」

? 2 「どうやら成功したみたいだね。」

? 3 「ああ、そのようだな。」

? 「失敗するかと思ったが・・・、何もなくて良かった。」

? 4 「失敗するわけないツスよ。俺が造ったんツスよ。」

? 5 「その様なしゃべり方だから、そう言われるんだ。」

? 2 「でも、彼の腕はたしかだよ？」

? 4 「良いこと言ってくれるじゃないツスカ。」

? 「そんなことより、本当に大丈夫なのか？」

? 5 「ああ、大丈夫だ。準備はできてる。俺達の目的を達成させよう。」

? 「ふっふっふ、そうか。」

? 3 「時間もなし、もう行くつぜ。」

?2「そつだね。」

?5「さてよ、先々行くのは良くない、そつだなまずは……。」

プロローグ：謎の5人（後書き）

うーん、とりあえずここまでですね。誤字、脱字がありましたら、教えてください。

第一話：依頼 1（前書き）

続けて投稿です。前は会話だけだった。でも後悔はしてないようなあるような。

まあ前は気にせず御覧ください。

第一話：依頼 1

「マイルーム」

この部屋に1人の青年がいた。彼の名はルーク・フィレン、亜空間事件を解決した英雄である。だが、今は彼はベッドで寝ている。病気出もなく怪我したわけではない。彼に取って久しぶりの休日になる……はずだった。

コンコン

「はい。」

「ルーク？いる？」

「（うるさいのが来たな）ああ」

扉が開き姿を見せたのはエミリアだった。

「何よ、その返事は？」

「別に（言ったら殺される）で、何のようだ？」

「うーん、実はさ。あなたにお願いしたい事があるの」

「なんだ？」

「実はナギサに声をかけたんだけど、依頼が入っていけなくなった

んだ。」

「んで？」

「だから、あんたに来てもらいたいんだ」

「どこに？」

「依頼」

「依頼？……悪いが、今日は俺は休……」

「お父さんに声を掛けたら、ルークと行けと言われた」

「おいおい……」

「ルーク……お願い」

少し考えて、ため息を付き

「わかったよ。付いて行けばいいんだろ？」

と答えエミリアが笑顔で

「ありがとう」と答えた。

「やれやれ」と言いながらベッドから出でる。

「依頼内容は？」とエミリアに聞く。

「うーん、何かパルムで不審な5人を見たんだって。」

「その5人を何者が調べると。」

「そう、その通り」

「さっさと終わらせよう。せつかくの休日なのに仕事するなんて」

「ぶつぶつ言わないの。はやくい」

「やれやれ」 呟きながら、部屋を出た。

第一話：依頼 1（後書き）

やっぱり小説は難しいですね。でも頑張ります。
……うん、頑張る

第一話：依頼2（前書き）

少し編集しました。

ルーク「編集して、余計変になっただんじやないのか？」

そ、そんなことないさ・・・。

第一話：依頼2

〳〳パルム草原〳〳

依頼を受けたエミリアと無理やり依頼を受けさせられたルークがいた。

「エミリア？ここに依頼にあつた不審な5人を見た場所か？」

「うん。そうだけど、誰もいないね？」

「だが、油断はするなよ。いきなり襲つて来るときもあるからな。」

つとエミリアに注意を促した。

「わかった」つと返事をするエミリア。

「とりあえず、辺りに誰かいないか、搜索するか。」

「そうだね、まずは人を探さな・・・」

「！！？エミリア！！伏せる！！」と叫ぶルーク。

「え？」

「ちっ」とエミリアを無理やり右に押す。

「痛っ」と地面に尻餅をついたエミリアが声を出す。

「くそ、どこからだ」辺りを見渡すルーク。っとそこに。

「あゝあ、外しちゃった。結構自信あったんだけどなあゝゝ。」
と声がした。

「誰だ!!」っと声がした方向に声を出した。

「普通、自分から名乗るものでしょう? 礼儀をしないの?」

「なに?」

「いたたたっ」お尻を擦りながら立ち上がるエミリア。

「大丈夫か。エミリア?」

「人を押し倒しといて、その台詞言うかな? まあ大丈夫だけど。」

「わりい、その方法しかなかったから。」

「いやいや、その他にも方法があるでしょう!？」

などの会話をしていると、

「何? 漫才でもやってるの? あんまり面白くないよゝゝ」

「姿を見せないお前に言われたくない。っていうか漫才なんてして
いない」と声がする方向に喋る。がしかし、

「どこ見て喋ってるの、後ろだよゝゝ。君の後ろ」

「「!!!??」「と振り向く2人。

「いつからそこに?」っと、ルークが質問をする。

「『お前に言われたくない』って辺りかなあ〜?」

「うつつ、何かしゃべり方が腹が立つ。「っとエミリアが言う。

「あははは、いい慣れてるから、痛くも痒くもないよ〜。どう?
?余計に腹が立ったでしょう?」

「それより、どうやって後ろに?」ルークが質問をする。

「あまり腹が立たなかったみたいだね〜、まあ、いいや。それより
答えないとね〜、君の質問に〜。簡単だよ〜。僕ちんの特殊能力だ
よ〜。」

「特殊能力?」

「特殊能力って言っても、ピンと来ないと思うよ〜。まあ、さらに
簡単に言うかね〜、……僕は普通の人間じゃあないんだよ。「
言い方が少し悲しそうに話す。

「えっ?」

「でも……、……どうでもいいことだよねえ〜。おっと忘れるとこ
ろだったよ〜。「っと、何かを思い出したかのよつに、背筋を伸ば
して喋る……が。」

「実はさ〜、君達にお願いがあるんだ〜」全く礼儀のない言い方で
ルークに言う。

「誰がお前のお願いを聞くもんか。」っと、そう答えるルークに。

「ほんと。襲撃しといてなによ、それ？しかも、礼儀がまったくな
いし」

エミリアもそう答える。

「困っている人を助ける仕事なんでしょう？助けてよ〜。子供だ
よ？僕ちゃん」

「子供も大人も関係ない。襲撃した理由を聞き出してやる。っってい
うか自分からいうか？『子供だよ？』って」っと言いながら、シッ
プウジンライを構える。

「子供だから、子供って言ったただだよ〜。それよりなに〜？子供
に武器使うの〜？大人げないなよ〜？ま、武器を使っても君は勝て
ないけどね〜」

っと言いながらゼロセイバーを構える。

「エミリア！！下がってる！！」

「ルーク、あたしも戦うよ」

「パートナーの言う事聞くもんだよね。って君が戦っても足手まといになると思うよ。」

つと笑いながら言う。

「うっさい、あんたに聞いて……」

「エミリア。下がってる……大丈夫、そう簡単にやられないさ。」

「つと真剣な顔でエミリアに言う。エミリアも観念したのか、

「わかった。」つと、答えた。

「さてと、準備はいいか？」つと子供に言う。

「僕ちゃんは、いつでもいいよ」。あ、そうそう、僕ちゃんの名前はミケ。ミケ・ルタ・ラータン」

そしてミケはルークに飛び掛かる。

第一話：依頼2（後書き）

とりあえず、ここまで。

ルーク「やっぱり、内容が」

誤字、脱字がありましたら教えてください。

ルーク「無視するなよ」

第一話・依頼3（前書き）

初戦闘シーンです。

ルーク「俺の出番が多くなるわけだ（内容は心配だけど）」

では、どうぞ

第一話：依頼3

「ふっ、遅いな」っといきなり飛び掛かるミケに対し、右側に避け、ミケに攻撃の体勢をしようとした時、

「君がねっ」っと言った瞬間、地面に左手を付き、左手をグイッと地面を押し飛び上がり、ゼロセイバーをしまい、インフィニットブラスターを構え、ルークに射つ。

「!!!!!!」

攻撃の体勢に入っていたせいか、顔を左に避ける事しか出来ず、2つの弾の内、一発頬にすれた。そして、そのすれた所から血が出てきた。

「ルーク!!」っと呼んだエミリアが戦いに加わろうとしたが、

「下がってろっっていただろ!!」っとしてルークが叫ぶ。

「あんな奴、一人で戦おうなんて、言う方がおかしいよ!!」

「あははは、仲間割れしてる〜」っとして地面に着地していたミケが、いつの間にかインフィニットブラスターをしまい、ゼロセイバーを回しながら、嘲笑う。

「ちっ、調子に乗りやがって」

「ルーク!!」

「……分かったよ、だが、無理だけするな」

「あんたも、無理はしないでよ」

「ああ、分かった」

「あちゃ〜、2対1になっちゃった〜。でもね〜、僕ちゃんはね〜、2対1でも勝てるんだよね〜。」「ゼロセイバーを回しながら言う。

「その自信、いつまで続くとおもうなよ」

「パートナーに『下がってる』っていった奴がそのセリフって……あははは、変なの〜。」「

「お喋りは、ここまでだ」っとミケに睨み付け、シップウジンライをしまい、アカツキ・印を持ち、ミケに向ける。

「あたし達をあまりなめないで」クラールリタ・ヴィサス？を持つエミリア。

「別になめてないけどな〜、」っとまだ嘲笑ってるのか、ゼロセイバーを回してる。

「その言い方とその態度が腹が立つっての。」「っとエミリアが言う。

「あつ、そうなんだ〜、だったらねえ〜」っとゼロセイバーを回すのをやめ、

目をつぶるミケ。そして……ゆっくり目を開け……

「……、普通に喋ればいいんだね」っと言い、ゼロセイバーをしまい、何やら構えをとり、そして……。

「じゃあ、戦うことも普通にいかせてもらっよ。もう手加減なしだよ！！本気でいくからね！！」っと言った瞬間体が光始めた。

「「！！！！」」

2人が驚く。

2人の前に姿を表したのは、暴走中のナノブラストの姿であった。

「ばっ、バカな」っと思くルーク

「嘘でしょう！？何でヒューマンがナノブラストができるのよ！！」っと思くエミリア。

(言い忘れましたが、ミケはヒューマンです)

「言ったはずだよ、僕は普通の人間じゃあないって、あと1つ言っとくけど、僕のナノブラストは時間制限はない。僕のナノブラストを止めることができるのは」

「お前を倒す事だ。」

「そのとおり。それと、自分の意思でも止めることも出来るんだ。さてと、お喋りは終わりだったね。じゃあ望み通り終わらせてあげよ。君達が死ぬことで。」っと思くルークに飛び掛かりあっという間

にルークの目の前に来ていた。

「!?!?速い!!」 っと言ったつかの間、

ドン!!

腹に蹴りを入れられ、吹っ飛ぶルーク。

「グッ!!」ルークが飛ばされる。

しかし、凄いスピードでルークに追いついたミケがルークを踏み台にするかのように、おもいきり腹を踏む。そしてルークが地面に叩きつかれる。

「ぐぐはぁッ!!」地面に叩きつかれたと同時に口から血を出す。

「ルーク!!」 っと近寄るが、

「……終わりだ、ルーク……」 っと言い残しルーク止めを指そうとしたが、。

……。

「言っただろ?お喋りは終わりだって。」 っとニヤリと笑ったルーク。

「ばっ!!!!」 っどびっくりしたミケ。その訳は……ルークがアカツキ・印で攻撃を防いでいたのだ。

何かを察知したミケだが、気付くのが遅く何かにぶつかり、遠くに吹っ飛ぶミケ。それはエミリアが放ったミラージュブラスト、コンル（氷刃ノ疾風）だった。

遠くに飛ばされた先には、大きな木が一本立っており、その勢いのまま、ミケは木に叩き付けられた。

バツキイイイ〜ツ

つと木が折れた音がし、勢いが強かったせい、そのまま木を通り越し、折れた木を少し離れた所で、地面に落ちた。

「ふう〜」。・・・（・・・終わつたかのか？）「つと警戒をルークは息を吐く。」

「ルーク!!大丈夫?」

「ああ、何とか。しかし、エミリア?なぜブラストがたまつてたんだ?」

「ああ、それ?実はバスクからもらつたのを食べたんだ。これだよ。」

「ん?そのクッキーみたいなやつ?」

「そうだよ、これ美味しいんだよ。」

「まあ戦闘中に食べるのはどうかしてるが、とにかく助かったよ。ありがとな、エミリア。」つとエミリアにお礼をするルーク。

「最初の言葉が気になるけど、まあいいか。」っと笑うエミリア。

「ふふっ」っとつられて笑うルーク。

「あつ、それよりルーク？あいつどうする？」っとルークに聞く。

「そのままにしとくのは、あれだしな。とりあえず連れて帰るか。」

「えっ？」っとエミリアが言った時、

「くっっっ」

「「！！！！」」

「ま・・・まだ・・・まだだ・・・僕は・・・まだ・・・負け・・・てない・・・」かなりフラフラになりながら立つミケ。あまり力が無いのかナノプラストの状態ではない。

「「・・・」」

そのミケを見たルークとエミリアがそれぞれ違う反応した。

「やれやれ」っとルーク

「あれだけ、やられておいてまだ立つかな」っとエミリア

「さあ、いい」っと言うミケだったが、その時。

？「あつ、見つけたぞ、ミケ。」

？2「あの野郎、またやりやがったな。」

「！！！！」

その声に驚いたルークとエミリアは、声が出たほうを見た。そこには、2人が歩いてくる。1人はミケと同じヒューマンで18〜19歳ぐらいの背の高い青年。もう1人はデューマンで15〜16歳ぐらいのなかなか背の高い少年がやって来た。

第一話・依頼3（後書き）

誤字、脱

ルーク「ちょっと、いいか（怒）」

あれ？何で、怒っ

ルーク「ミラージュブラスト！！！」

ぎゃ~~~~~。

エミリア「誤字、脱字があったら教えてね」

そ……それ……俺の……セリフ……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4736z/>

ファンタシースターポータブル2i～異世界の5人～

2011年12月18日01時48分発行